

# シェイクスピア

言語 | 欲望 | 貨幣

テリー・イーグルトン ▶ 著

大橋洋一 ▶ 訳





シェイクスピア

WILLIAM SHAKESPEARE

言語|欲望|貨幣

テリー・イーグルトン▶著

大橋洋一▶訳

平凡社

シェイクスピア——言語・欲望・貨幣——

1992年4月20日 初版第1刷発行

1992年8月25日 初版第2刷発行

著 者 テリー・イーグルトン

訳 者 大橋洋一

装 幀 東 幸見

発行者 下中 弘

発行所 株式会社平凡社

〒102 東京都千代田区三番町5

電 話 東京03(3265)0471〔編集〕

03(3265)0455〔営業〕

振 替 東京8-29639

印 刷 明和印刷株式会社

製 本 大日製本印刷株式会社

ISBN4-582-33306-0

落丁・乱丁本のお取替は直接小社

読者サービス係までお送り下さい（送料小社負担）

NDC分類番号930.2 四六判（19.4cm）

総ページ272

# シェイクスピア

言語

欲望

貨幣

*William Shakespeare*

by

Terry Eagleton

Copyright © 1986 by Terry Eagleton

Japanese translation rights arranged with Basil Blackwell

through The English Agency (Japan) Ltd.

Japanese edition © 1992 by Heibonsha Ltd., Publishers, Tokyo

Printed in Japan

*For Anne and Mary*

はじめに

かつてモンティ・パイソン・チームは、いつもの悪ふざけで、「ブルースト要約」コンテストを開催したことがある。☆制限時間は、わずか十五秒。この間に、ブルーストのプロットを要約するわけだが、これには、初回は水着を着用し、二回目には夜会服で正装するというおまけもついていた。だが思うに、わたしの試みも無鉄砲さにかけては、これよりも、ほんのわずか劣るというにすぎない。シェイクスピアの全作品をまんべんなくあつかうことなど、はなからあきらめている。ただ、主要な作品と一般に認められているものについて、手短かに論じたというにすぎない。執筆に際しては、作品が書かれただいたいの順番を、ある程度考慮したが、ジャンル上の分類については、さして関心を払わなかった。ジャンルなどというのは、わたしには必要以上に重くみられているとしか思えないのだから。というわけで、わたしは自分の興味をひく戯曲についてしか書いていない。ただし、シェイクスピア劇について、言語と欲望と法と貨幣と肉体の相互関係にねらいを定めた議論を中心に、独自の観点を展開しようというもくろみはあった。興味をもたれる方は誰であれ、

わたしの議論を足がかりにして、シェイクスピア作品の理解をさらに深めることもできるだろう。ただし本書は、ここであつかわれる話題をめぐる、ふつうの意味での歴史研究ではない。むしろ、わたしの心づもりでは、これは政治記号論の練習なのだ。テキストに関連した歴史を、テキストの文字そのもののなかに、どうしたら位置づけられるかという問題の。

現代の批評理論を（エイヴォン川の白鳥<sup>☆</sup>）にあてはめて論ずることには抵抗を感じるひとも多いと思われる。けれどもそう感ずるひとは、シェイクスピアの戯曲には『ジュリアス・シーザー』における時計以外にも多くの時代錯誤があることを思い出すべきだ<sup>☆</sup>。もちろん、確実な証拠を示すのはきわめてむづかしいけれど、シェイクスピアを読むと、彼がヘーゲル、マルクス、ニーチェ、フロイト、ウイトゲンシュタイン、それにデリダの著作を、きつとよく読んでいたにちがいないという感慨を禁じえない。おそらくこれは、シェイクスピアという保守的な父権制信奉者をただ敬して遠ざけてもそれなりに意味があるとしても、そのいっぽうで、わたしたちがシェイクスピアから学べるものも、まだたくさん残っているということだろう。

本書で展開したいいくつかの論点について、英文学の専門家の立場から論評を加えていただいたウオッドム・コレッジの同僚ロビン・ロビンズならびにアラン・ウオードには、とくに感謝したい。ただし、ふたりはここで、わたしの共犯者として名を連ねているのではない。責任はすべてわたし



ひとりにある。また、本書を準備中に援助と助言を惜しまれなかった以下の方々、キャサリン・ベルシー、ジョン・ケアリー、フィリップ・カーペンター、ジョナサン・ドリモア、エムリス・ジヨーンズ、デイヴィッド・ノルブルックにも同様に感謝したい。なおシェイクスピアからの引用はすべて、ピーター・アレグザンダー編集の一巻本全集（一九六二年）に拠った。

テリー・イーグルトン

# 目次

第1章 言語

『マクベス』『リチャード二世』『ヘンリー四世』  
11

第2章 欲望

『夏の夜の夢』『十二夜』  
51

第3章 法

『ヴェニス商人』『尺には尺を』『トワイラスとクレシダ』  
91

第4章 「無」

『オセロー』『ハムレット』『コリオレーナス』  
153

第5章 価値

『リア王』『アテネのタイモン』『アントニーとクレオパトラ』—— 179

第6章 自然

『お気に召すまま』『冬の夜語り』『デズエスト』—— 209

おわりに—— 225

訳者あとがき—— 240

訳注—— 250

原注—— 261

索引—— 269

## 【訳者付記】

1 シェイクスピアの作品からの引用について。引用箇所を表示は原著の表示にならない、大文字のローマ数字で〈幕〉を、小文字のローマ数字で〈場〉をあらわしている。行数は漢数字で示した。たとえば I・ii・三とあれば、これは第一幕第二場第三行を指示する。著者が典拠としているピーター・アレグザンダーの一卷本全集は、いまもなお標準版としてイギリスでは多く用いられているが、その行数表示を、かつて決定版といわれたケンブリッジ版（一八八六年）のそれにあわせているため、韻文で書かれた台詞の行数は表示できても、散文の台詞の行数は、本の版型のちがいにより表示できない。したがって散文の台詞の引用には、原則として幕と場面のみを表示をおこなっている。

著者は、文中で引用箇所を表示せず引用しているところもあるが、議論の流れをそこなう可能性を覚悟のうえで、あえて参考のために引用箇所を、著者が使用しているアレグザンダー版にもとづき括弧（ ）に入れて示した。

行数表示そして時には場面も、他のシェイクスピアの全集とずれることもあるが、シェイクスピア作品の邦訳は、ほとんどがケンブリッジ版全集（つまりアレグザンダー版）の場面分割を踏襲しているため、邦訳を参照する場合には問題はないと思われる。

2 1の引用箇所にかぎらず、その他の（ ）内も訳者による補注・補足である。

3 本文中☆を付した部分には、訳注を巻末に施した。

4 原注は、本文中に\*1、\*2……を付し、巻末に収めた。

# 第1章 言語

——『マクベス』『リチャード二世』『ヘンリー四世』

## I

たとえシェイクスピアについて、ほとんどなにも知らないひとでも、シェイクスピアの芝居について、頭のなかに漠然としたイメージがあるにちがいない。シェイクスピアの芝居はどれもみな社会の秩序や安定を重んじているらしい、と。シェイクスピアの芝居の台詞まわしはどれもみな驚くほど雄弁で、隠喩がつきつきとよどみなくあふれでて、さしずめ現代の理論家なら、そのありようを指して、おそらく自己増殖的な「テキスト生産作用」と呼ぶにちがいない、と。問題は、シェイクスピアのこのふたつの面が、潜在的にたがいに相反するものであるということだ。たとえば記号の安定状態とはなにかを考えてみよう。それは、それぞれの言葉がしかるべき位置にどっしりと腰をおちつけ、それぞれのシニフィアン（眼にみえるしるし<sup>マ</sup>、あるいは音<sup>ク</sup>）がそのシニフィエ（すなわち意味）と一対一の対応関係にあることをいう。この状態は、どのような社会にとつても、秩序

を維持するためにはならぬものだろう。安定した意味、承認された定義、規則的な文法——いずれをとつても、これは、よく秩序の保たれた政治状況を反映するものであり、また、それを育むのにおおいに貢献する。ところが、こうしたことすべては、シェイクスピアの華麗な言葉あそび、多彩な比喩表現、謎めいた台詞によつて、根底からゆさぶられてしまう。社会の安定こそすべてと考えるシェイクスピアの信念が、その信念を表明する「分節化する」言語そのものによつて、ぐらつてしまうのだ。シェイクスピアにとつて、書くという行為は、おのれの政治的イデオロギーとは相容れない認識論（知についての理論）を招きよせる危険な面ももっていた。これが、シェイクスピアを深いところでゆさぶっていた気がかりなジレンマである。はたせるかなシェイクスピア劇の多くは、このジレンマを解消する手だてを模索することに、そのエネルギーを費やすことだろう。

偏見をもたぬ読者——ただし、偏見のない読者について語るなら、シェイクスピアそのひとはむしろんのこと、当時の観客、さらに、ほとんどすべての文芸評論家にも、残念ながらおひきとり願わねばならないのだが——にとつて、たしかな手ごたえとともに伝わってくるのは、『マクベス』のなかで肯定的な価値は、もっぱら三人の魔女たちの側にあるということだ。この劇のなかで魔女は、れっきとしたヒロインである。たとえ劇そのものが、この事実をどれほど軽くみようと。たとえ



批評家たちが魔女たちを、どんなに卑しめてきたとしても。魔女たちは、マクベスのなかに眠っている野望を目覚めさせる。魔女たちは階層社会秩序の安定をゆさぶる野望を触発することで、秩序を神聖視する姿勢のなんたるかを赤裸々に暴きたてる。つまり社会は、ひと皮むけば、日常茶飯事化した暴力と、いつはてるともない戦乱をかかえこんでいるのだから、社会秩序への敬意などというものは、社会の真の姿を覆いかくす欺瞞にすぎないことになる。このような暴力的秩序から魔女たちは、一歩も二歩も身をひいている。いや、身をひくどころか、彼女たちは、社会の周辺にある薄明の境界地帯こそ、みずからにふさわしい居場所と考え、そのなかで、女性どうしの共同生活をいとなみ、男どもの部族闘争の巻きぞえになるのを嫌い、軍人の名誉など歯牙にもかけないのだ。彼女たちは、その謎めいた言葉、そのいかにも曖昧模糊とした言葉（魔女たちは「ふたつの意味を使いわけて、われわれをそのかす」〔V・VIII・二〇〕）によって、階層秩序社会を確実に攪乱する。魔女の言葉づかいは、相手をじらして苦しめる性格のもので、その曖昧さゆえにマクベスの心の奥底にはいりこめ、マクベスを内側からむしばみ、切り裂き、彼のなかにある欠如をあかすみにだす。この欠如こそ、マクベスがそれと気づかぬうちにかかえこんでいた空洞であり、以後、それは彼をむしばむ欲望の源となるだろう。魔女が体现するのは、この作品の余白にたゆたっている無意味の領域、いくなれば詩的戯れの領域である。無意味な戯れであっても、この領域には、

「マクベス」「リチャード二世」「ヘンリー四世」